

山田良政・純三郎 兄弟

1911（明治 44）年の辛亥革命で中華民国が建国されてから今年が 100 年の節目の年を迎えました。

弘前に「中国革命の父」孫文の辛亥革命に尽力した山田良政（1868—1900）・純三郎（1876—1960）の兄弟がいます。

山田兄弟は、元津軽藩士で、明治維新後「津軽塗」の振興に貢献した山田浩蔵の長男・3 男として、弘前市在府町に生まれました。兄弟ともに東奥義塾高校の卒業生です。

良政は東京海洋大学を卒業後、1890（明治 23）年に北海道昆布会社に入社し上海支店へ赴任した。その後、日清戦争では陸軍通訳官として出征、戦禍を目の当たりにした良政は政治志向を強め、孫文と面識を得たのは 1899（明治 32）年 7 月、東京の三崎町で会談したときであった。これ以後、良政は孫文の革命活動を支援するようになるが、孫文の祖国に対する情熱やアジア復興という理念などに感銘を受けたようです。

1900（明治 33）年、孫文は中国南部の広東省、惠州で清朝打倒の戦い、いわゆる「惠州起義」を起こしました。

その時期、良政は東亜同文書院の前身である南京同文書院で教授兼幹事になっていたが、短期間で辞職し「惠州起義」に身を投じた。だが、結局この戦いは失敗に終わり、良政は清朝軍に捕らえられ、1900（明治 33）年享年 33 歳の若さで中国革命で日本人初の犠牲者となったという。しかし、最期の詳しい状況については現在も定かではない。

一方、純三郎は 1901（明治 34）年から東亜同文書院に勤務していたが、日露戦争出征後、東亜同文書院を辞職し南満州鉄道株式会社に入社した。やがて嘱託となり、兄・良政の意志を受け継いで孫文を支える役割を担っていくことになった。

孫文の側近として信頼され、蒋介石とも親交を持った。1925（大正 14）年 3 月に孫文は北京で亡くなるが、純三郎は孫文の死に水を取った唯一の日本人であると言われていています。

1930（昭和 5）年代に入ると日中関係は戦争の時代へと突入する。日中戦争中、純三郎は上海で日本語専門学校の校長を務めていたが、やがて敗戦一。敗戦当時、上海には十万人近い日本人がいたが、国民政府軍により集中營に移住させられ、行動も管理されるなど、厳しい制約の下に置かれるようになった。

しかし、純三郎に対しては従来通りの生活を認めるという特別待遇をしたのである。その理由は、かつて孫文の革命事業に協力したということによるものだった。敗戦直後にあっても、中国側の純三郎に対する評価が高かったことの証しであり、当時の状況を考えると驚きを禁じえない。

敗戦後も中国に長く残り、在留邦人の帰国を手伝った後、日本に引き上げ、東京都練馬区に居住した。そして1960（昭和35）年その地で亡くなった。

山田家の菩提寺である弘前新寺町の貞昌寺に1919（大正8）年に建立された良政の石碑には孫文が筆をとった追悼文が刻まれ、国境を越えてアジアの平和を願った良政の志をたたえている。

純三郎の碑は、青森県日華親善協会などが関わり、1975（昭和50）年5月に、兄・良政の碑と並んで台湾の国民政府によって建立された。碑の上部中央に篆（てんこく）刻されている碑銘「永懷風義」（「立派な行いを永くおもう」）の意味は、蒋介石が贈ったものである。

日中両国の懸け橋となった山田兄弟の功績は高く評価できるものと思います。
（愛知大学東亜同文書院大学記念センター 引用）



山田 純三郎 碑

山田 良政 碑